

## ジャカルタの結婚式とパーティー

高梁市立高梁小学校 教諭 佐藤裕之  
(元ジャカルタ日本人学校)

インドネシアの首都ジャカルタに暮らした間に、4回ほど結婚式やパーティーに参加する機会がありました。日本と同様に、宗教や居住する地域、所得等により結婚式の様式は様々です。今回紹介するのは、私の家で3年間運転手として働いてくれた「ウディンさん」の娘さんの結婚式の様子です。

「近々娘が結婚するので、是非参加してほしい。」とウディンさんから聞いていた私たちの元に、とても立派な招待状が届けられました。娘さんは、同じ職場で知り合った彼氏と結婚を決意し、すでに結納は済ませています。ウディンさんはイスラム教の信者で、平均月収はおよそ2万円。一般的な労働者としては、平均的な収入です。ちなみに、結婚式とパーティーの総費用は、およそ20万円程度かかるそうですから、ウディンさんにとっては一世一代の大イベントです。結婚が決まる前から、ウディンさんはよく自分の結婚式では、こんなことをしたいと楽しそうに話していました。

さて、結婚式は2月4日。式場は自宅に隣接するイスラム教の寺院です。すっかり準備を整えた会場に向かって、テンポのよいリズム隊に先導された新郎とその家族や親族が歩いてやってきます。ウディンさん一家はそれを迎え入れ、寺院に案内します。

寺院の中には、両家の家族や親族、近隣の人々が壁を背に向かい合って座ります。結婚を立証するための役人(日本で言うと市役所の戸籍係の人?)が到着するまでの間、この地区のイスラム教の指導的な立場にある人が、新郎新婦に対して結婚の心得のようなことをユーモアを交えながら話しています。

役人が到着し、結婚の儀式が始まると、テーブルを囲んで新郎新婦とその両親、役人などが座ります。新郎新婦は、神に感謝の祈りをしたり、婚姻届にサインをしたり、指輪交換や誓いの言葉を述べたりします。最後に、新婦が父親の手を握りながら、今まで育ててくれた感謝の言葉を述べます。ここで、感極まったウディンさんは、号泣してしまいました。娘の結婚を喜ぶ父親としての気持ちは、どの国でも同じだと思いました。その後、両家の親族が一列になって、挨拶を交わしていき式が終わります。新郎も新婦も喜びの涙があふれていました。

式が終わった後は、自宅でのパーティーが始まります。近所の人や新郎新婦、両親の友人など、のべ500人ほどの来客があるそうです。来客者は、ご祝儀(平均500円程度)を渡した後、お祝いの言葉を述べ、思い思いに食事を取りながら歓談します。ちなみに、イスラム教ですのでアルコール類は一切出ません。中には、新郎新婦と記念写真を撮る人もいます。そして、しばらくたつと帰っていきます。ウディンさんは一人一人に挨拶をして大忙しです。

パーティーは深夜まで続きます。圧巻なのは「ダンドゥット」といわれる歌謡ステージです。自宅の近くにステージを作り、バンドマンと歌手(イベント専門のプロ)が大音響で延々と演奏します。ステージの下では、来客者が音楽に合わせてダンスを踊る人々がいます。

ウディンさんは、パーティーで「ダンドゥット」をして、たくさんの人に踊ってもらうことをとても楽しみにしていました。自分の夢がかない、無事に結婚式を行うことができた満足感に笑顔いっぱいのウディンさんでした。



(娘さんとウディンさん)



(新郎一族 到着)



(結婚の儀式)



(ダンドゥット)